


尊親さんのむらづくり

報徳のおしえをうけつぐまち 





とよころちょうみんけんしょう
豊頃町民憲章には「わたくしたちは、^{せんじん}先人のたくましい^{かいたくせいしん}開拓精神と^{ほうとく}報徳のおしえを
うけつぐことを^{ほこ}誇りとし・・・」ということが^か書かれています。



ここに書かれている「^か報徳^{ほうとく}のおしえ」を明治時代に現在の^{めいじじだい}豊頃町^{げんざい}二宮^{とよころちょうにのみや}で^{じっこう}実行した人が、^{ひと}
^{にのみやそんしん}二宮尊親です。



尊親は、江戸時代の終わりのころ、農民たちのために活躍した二宮尊徳（金次郎）の孫です。

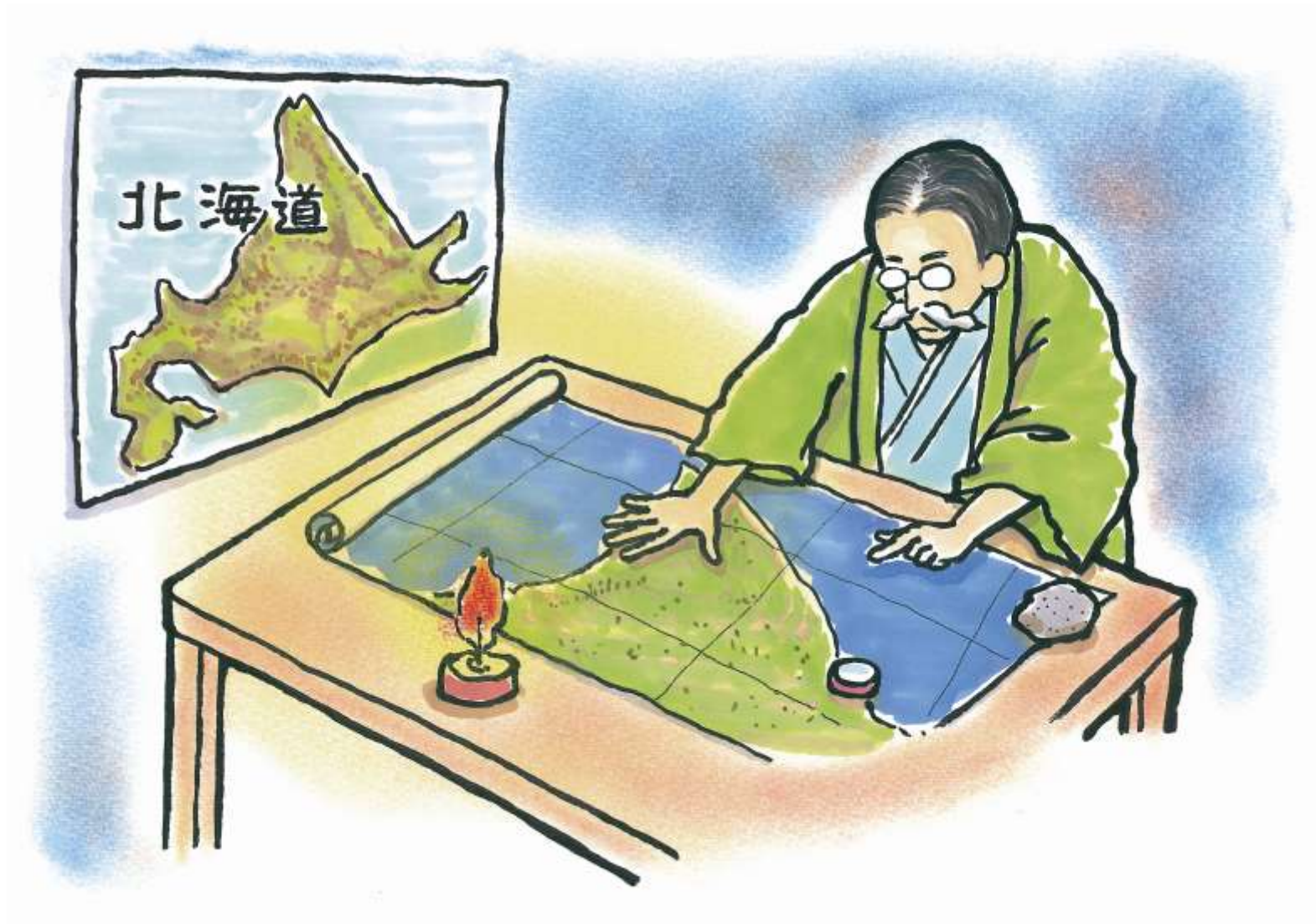
尊親のおじいさんの尊徳は、荒れてしまった田畑を再び開墾し、農民たちを救いました。



この時、大自然の恵みへの感謝と「至誠・勤勞・分度・推讓」の考えを農民の暮らしの中で実践するようにしたのです。



尊親そんしんが生まれうたれたころ、時代じだいは江戸えどから明治めいじに移うつり、世よの中なかは大きおおく変わかりました。
この動きうごの中なかで、多おほくの農のう民みんの暮くらしが苦くるしくななっていきいきました。
そこで、相馬そうまで暮くらしていた尊親そんしんは「報徳ほうとくのおしえで農のう民みんを救すくいたい」と考かんがえ、仲間なかまたちとともともに興復社こうふくしゃをつつくりました。



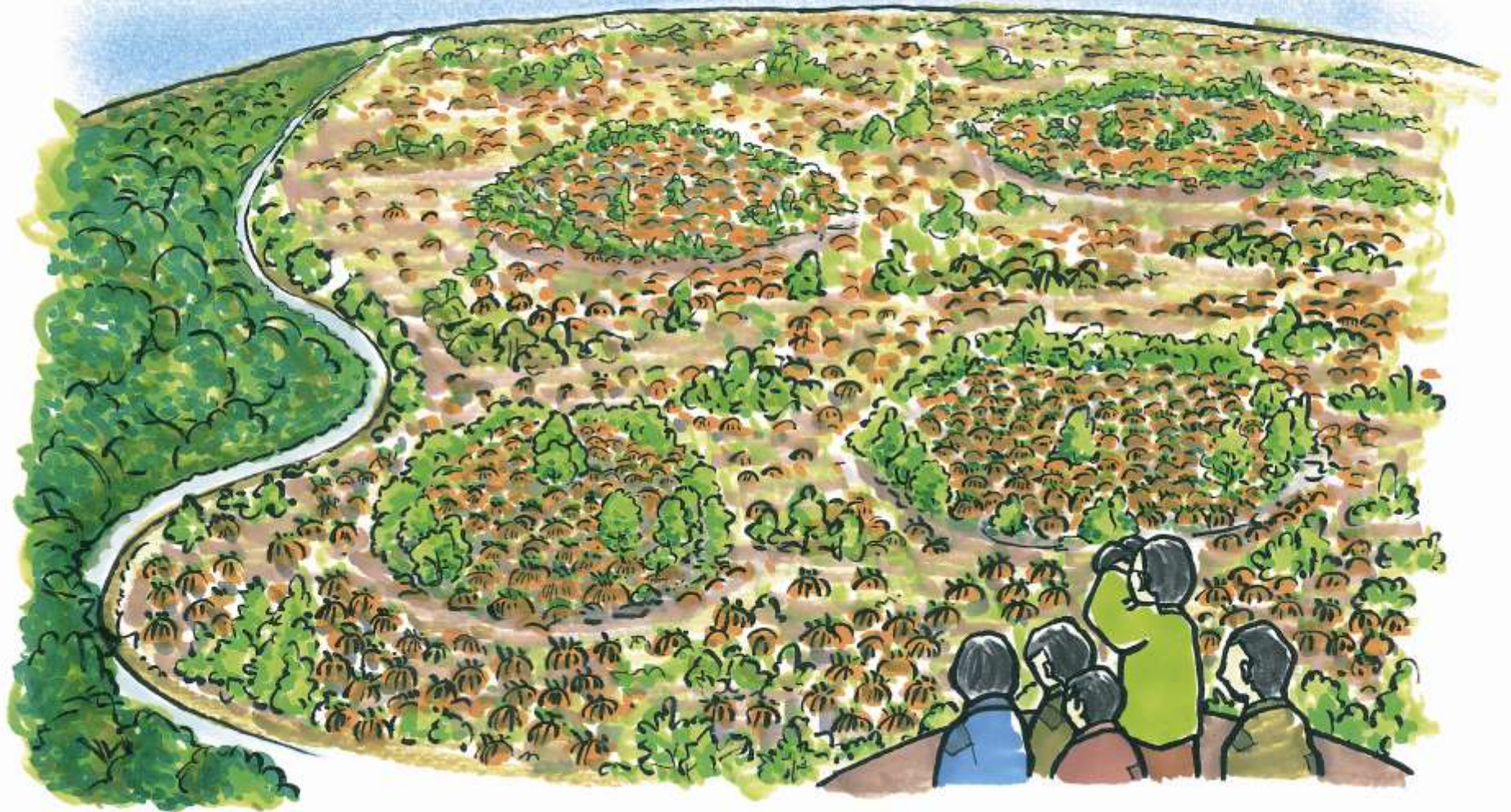
そんしん のうみん ゆた く とち さが
尊親は、農民が豊かに暮らせる土地はないものかと探しはじめました。



そんしん ひろ ほっかいどう りそう とち しん なかま さっぽろ む
 尊親は、広い北海道に理想の土地があると信じ、仲間とともに札幌に向かいました。

さっぽろ よ とち み とかち はい おおつ とかちがわ
 しかし、札幌では良い土地が見つからなかったため十勝に入り、大津から十勝川

しゅうへん とち さが
 周辺の土地を探すことにしました。



ある日、大津の宿で知り合ったトカンというアイヌの若者の案内で、ウシシュベツ
げんざい にのみやほうめん い せんしん わたし さが もと りそう とち
(現在の二宮方面) に行った尊親は、「これこそ私が探し求めていた理想の土地だ。」
おも さけ めいじ ねん がつ にち
と思わず叫びました。1896(明治29)年7月29日のことです。

【豊頃町教育委員会】

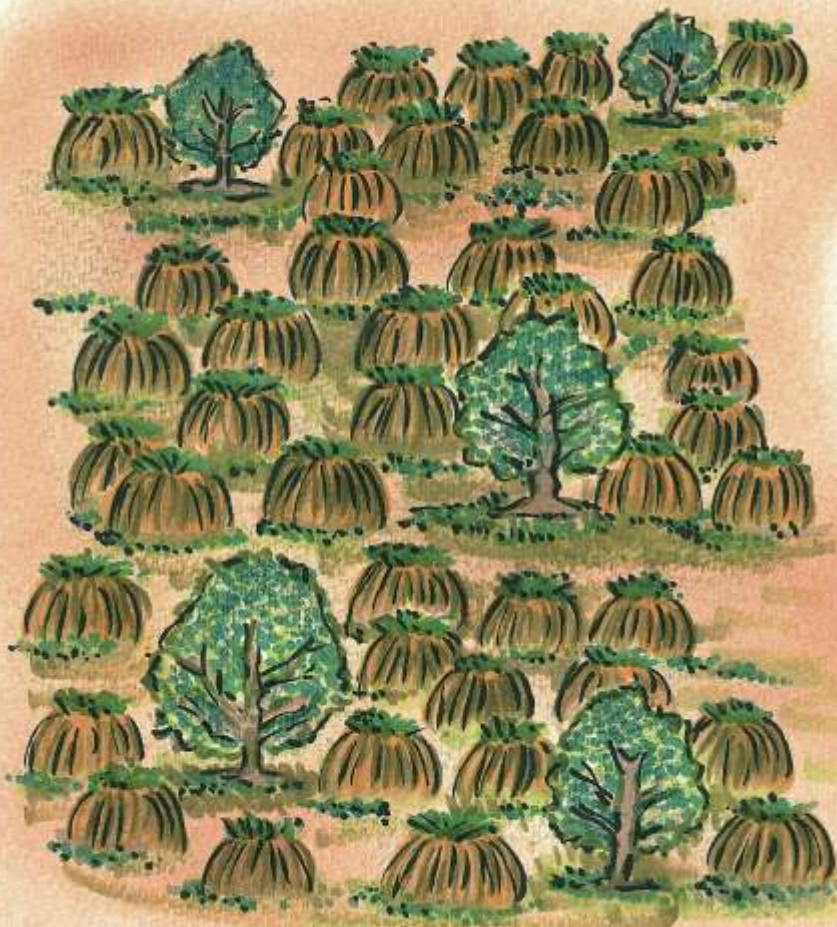


理想の土地を見つけた尊親は、故郷の相馬にもどり北海道へ移住する計画を立てました。

そして移住を希望する人たちを集めることにしました。

「北海道は広くて大きいぞ。」「まじめにがんばれば土地がもらえるぞ。」

多くの人が集まりました。



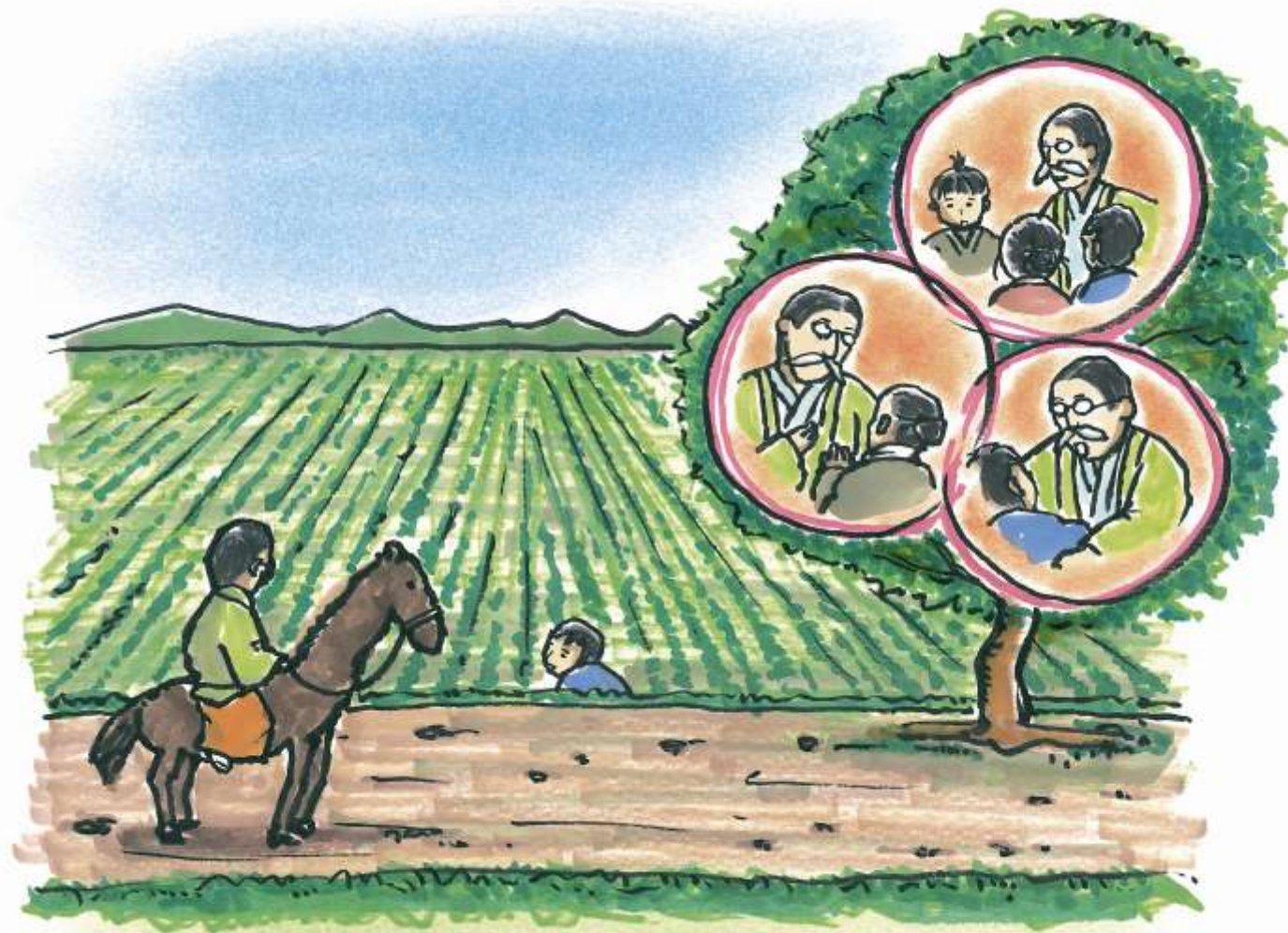
そうま おおつ みち とお おおつ おんな ひと こ ふね とかちがわ
相馬から大津までの道のりは遠く、大津からは、女の人と子どもたちは舟で十勝川
のぼ おとこ ひと おおつかいどう ある もいわ
を上り、男の人たちは大津街道を歩き、茂岩でいっしょになりました。

めいじ ねん がつ にち そうま こ さき す こ
1897(明治30)年4月8日、相馬からやってきた12戸と先に住んでいた6戸
の人たちでウシシュベツの^{かいたく}開拓が^{はじ}始まりました。

【豊頃町教育委員会】



かいたく せいかつ
開拓の生活はきびしいものでした。ふと き き
太い木を切りたおしたり、やちぼうず と のぞ
工事をしたり、くるひもくるひもつらい仕事が続きました。
そんしん みずか せんとう た かいたく しごと たす
尊親は、自ら先頭に立ち、開拓の仕事を助けてました。



そんしん いじゅうしゃ ところ
尊親は、移住者たちのことをいつも心にかけていました。

そのため、あさはや いじゅうしゃ だいじょうぶ わる
すぐに知らせなさい。」「こま 困ったことがあったら、すぐに申し出なさい。」などと声をか
けてまわりました。



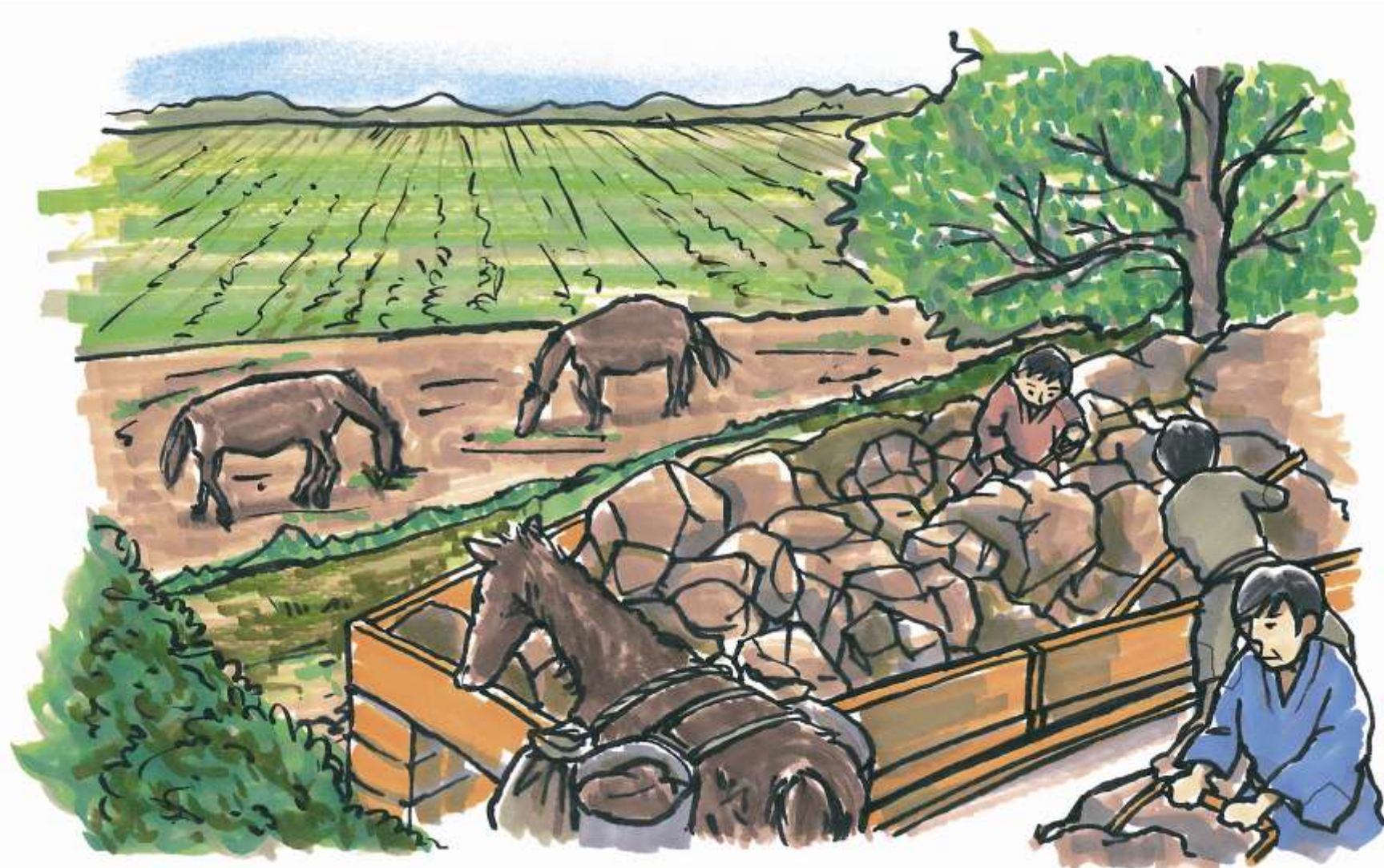
尊親^{そんしん}は、開拓^{かいたく}のつらい仕事^{しごと}を続ける^{つづ}る移住者^{いじゅうしゃ}たちに、励まし^{はげ}あったり、勉強^{べんきょう}したりする
ため「芋コジ^{いも}」という勉強会^{べんきょうかい}に参加^{さんか}するように呼びかけました。

「芋コジ^{いも}」では、どんなにつらくてもがんばる^{こころ}心^もを持ち続ける^{つづ}ることを学習^{がくしゅう}しました。

【豊頃町教育委員会】



尊親^{そんしん}は、移住者^{いじゅうしゃ}たちのやる気^きを高めるため、^{はたけ}「畑づくりに^{どりよく}努力し、みんなのお手本^{てほん}になるような人^{ひと}」をみんなで^{えら}選び、芋コジ^{いも}の場^ばで^{ひょうしょう}表彰しました。



いじゅうしゃ どりよく むら すこ じゅんちょう すす
移住者の努力によって、村づくりは少しずつ順調に進んでいきました。

ことし いじゅうしゃ ふ いえ あたら た だいす
「今年も移住者が増えたぞ。」「家を新しく建てなおすぞ。」「イナキビ、大豆、たまねぎ、ジャガイモが豊作だぞ。」
ほうさく うま そだ ぼくじょう あか げんき こえ
「馬を育てる牧場をつくるぞ。」明るく元気な声が、ひびきわたりました。



いじゅうしゃ 移住者たちは、「みんなで、^{どうろ}道路や^{はし}橋を作ったり、^{つく}なおしたりする。」^{かいぎ}「会議には、^{ちこく}遅刻
しない。」などの^{じぶん}きまりを自分たちで^{つく}作ったり、



すいがい 水害にそなえて共同の貯蓄をはじめたりするなど、みんなで助けあい、「報徳のお
しえ」は実行されていきました。



「そんしんせんせい 尊親先生が おし 教えてくれたことを まも しっかり守り、もし先生が せんせい この土地を とち はなれることがあっても、じぶん 自分たちで むら 村づくりを すす 進めよう。」

1902 (明治35) 年に「めいじ 牛首別報徳会」が ねん 誕生しました。たんじょう



そのころ、別の土地で十勝の開拓に力をそそいでいた依田勉三や関寛斎などが、
「報徳のおしえ」を聞きに尊親のもとを訪れるようになりました。



尊親そんしんは、子どもたちの教育きょういくにも力ちからを注そそぎました。

「私わたしは、報徳ほうとくのおしえにしたがい、みなさんのお父さんやお母さんとお父さんやお母さんと村づくりをしてきました。きびしくつらい10年間ねんかんでしたが、みなさんのお父さんとお母さんがまごころを持って働き、ぜいたくをせず、助けあってきたから、りっぱな村づくりができたのです。このことをみなさんも忘れないでください。」と語る尊親そんしんの目はうるんでいるように見えました。

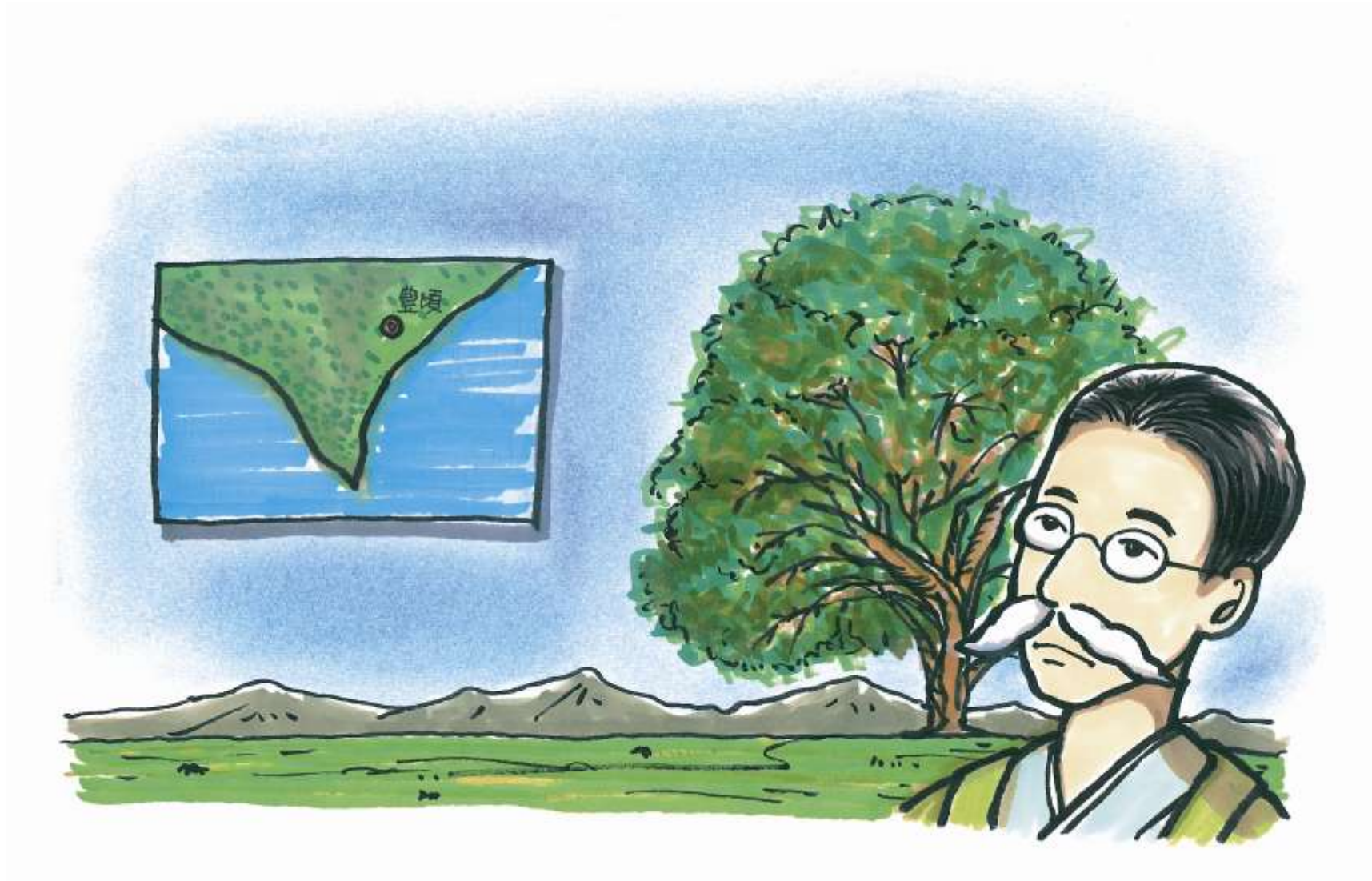
【豊頃町教育委員会】



尊親は、農会（現在の農業協同組合）の会長として、農作物のひんぴょう会を開くなど、地いきの農業のはってんのためにも力をつくしました。

そして今もなお、小高い丸山にたつ報徳二宮神社から、尊親は祖父の尊徳とともに二宮・豊頃・十勝の人たちの活躍を静かに見守っているのです。

【豊頃町教育委員会】



おしまい